



巻頭言

大きな一歩

A big step forward

●
渡辺 正 Tadashi WATANABE

東京大学生産技術研究所 教授



1997年に告示、2001年に実施の第7次学習指導要領は、理科教育の面で見ると二つの点で愚かなものだった。第一は教育内容をスカスカにする「ゆとり路線」、第二が、判断力の乏しい生徒に好き勝手をさせる科目選択制。前者は教育をジョークにし、後者はフェイクにする。大学との接続もゼロに等しい。諸悪の根源は教育の国家統制……。

危機感をもった私は、化学会と物理学会、科学技術連合の有志と語り、文科省向け教育制度の手直し要求キャンペーンを始めた。だがしばらくは馬耳東風で、07年に小幅改訂された指導要領も、私たちの意見をまったく反映していない。

異議申し立ての声を強めたところ、ようやく折れた文科省は09年の末、まず高校理科教科書の検定廃止を決断してくれた。これで、初中等教育の一部とはいえ、ほとんどの先進諸国（米国なら諸州）がやっている現代的教育への一歩が踏み出せる。

吉報を受け私自身が、とりあえず文科省と共同で半年かけ、ひな形用に高校1年用の理科教科書（350頁）をつくった。次の段階で学ぶ個別科目（化学・物理・生物など）が自然科学の中でどんな位置にあるかを見晴らせる本だ。現在、同書を参考にしつつ7社が、それぞれ顔つきのちがう新しい理科教科書8冊を制作中。10月末にはできて来春から使われる。そのあと書かれることとなる個別科目の教科書も、文科省の検定は受けない（中身に立ち入らない「認定」だけは受ける）。

——という話を、化学オリンピックの会期中、国際運営委員長の西江大学・李憲煥教授（いま韓国化学会で次期会長候補の一人）から折々に伺った。うち一度は野依先生と中川文部科学副大臣も同席されていたので、隣国の快挙は日本政府にも伝わる……としたい。なお李先生は、開会式の前日もソウルで改革の意義を説くシンポジウムを開いていたため、来日は同日の真夜中だった。彼の熱意がよくわかる。

初中等教育に関心のある読者なら、このたびの改革に先立つ韓国の理科教育が、日本の現状に瓜二つだったとおわかりだろう。高校（大学入試）までの理科教育は、暮らしにも大学教育にも縁遠く、中身の薄い閉じた世界をつくっているから、大学に入学後は、覚えたことの大半を忘れて頭をリセットしなければいけない。その惨状は、戦後65年に及ぶ愚行、先進諸国に類を見ない姿の教科書検定が生んだ。

「前途は楽観していない。高校現場や教員養成系の方々が反発するだろう。けど方向性に狂いはない」と李先生は、コーネル大学仕込みの流暢な英語で熱っぽく語った。

日本の初中等化学教育も刷新しよう。まずは日本化学会が声を上げるべし。

英訳版は756ページをご参照下さい。English version, see pp 756.

© 2010 The Chemical Society of Japan